

氏 名 (本籍)	あお やぎ ゆ か 青 柳 由 佳 (東 京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (デザイン学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6202 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	資源と生業からみた民家の発達と構法の変容 －岐阜県飛騨市宮川村を事例として－

主	査	筑波大学教授	農学博士	鈴 木 雅 和
副	査	筑波大学教授	工学博士	安 藤 邦 廣
副	査	筑波大学講師	博士 (工学)	橋 本 剛
副	査	筑波大学教授	博士 (工学)	藤 川 昌 樹

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

日本の民家は、江戸後期から明治大正時代に、養蚕業の隆盛によって屋根裏空間が拡大し、各地に多様な屋根形態が発達した。その代表的な例が白川郷の合掌造りであり、それらの成立過程は民家研究の重要な課題として研究が積み重ねられ、民家は生業と深く関わりながら発達を遂げてきたことが明らかにされてきた。本研究はその養蚕農家としての民家が、近代の大正時代から昭和前期にかけて更なる発達を遂げ、新たな民家形態と構法に変遷する場合があることを指摘し、その変容過程を明らかにするとともに、要因について考察することを目的としている。

(対象と方法)

日本の養蚕業の中心地域の一つであり、また戦後の生活の近代化の影響が緩やかで民家の保存状態の良い、岐阜県の飛騨地方の旧宮川村の民家集落を調査対象としている。宮川村を概観した上で、保存状態がよく、近代の変容過程が明確な種蔵集落を中心に、現存する民家の実測調査と住民や建築職人への聞き取り調査を基本として、その周辺地域の民家の形態や構法の悉皆調査をあわせて、この地域の民家の特徴と変容過程を明らかにしている。またこの集落の生業や土地利用や植生、山林原野の入会利用の変遷についても調べて、民家変容との関係について考察する方法を用いている。

(結果)

宮川村の民家は、大正時代から昭和初期にかけて、茅葺きの民家から檼板葺きの三層民家に変遷した。屋根が茅葺きから檼板葺きになると同時に小屋裏空間が拡大した。壁は板壁から土壁へと変遷した。変化の時期は大正時代にまず屋根が茅葺きに変わり始め、昭和初期にはすべて檼板葺きに変わった。壁の変化はそれより緩やかで、川沿いの集落では土壁への変化の割合が大きく、山間の集落では土壁への変化が小さい傾向がある。

(考察)

以上のような構法の変化の社会経済的な背景としては、まずこの地域の生業の変化を挙げている。すなわ

ち明治時代までの養蚕業に加えて、大正時代に下流の平野部への馬の貸し付けとしての作馬が始まり、馬の飼育数が増える。その馬の飼料と敷草の需要増加で茅が不足した。また干草の貯蔵空間として小屋裏の拡大が求められた。その結果、屋根が茅葺きから樽葺きへと変遷したと考えられる。屋根が樽葺きになると小屋組の材料も含めて木材の使用量が増大し、それを補うために、板壁に代わって土壁が導入された。この土壁の導入の背景には昭和初期のこの地域の水田の拡大があり、その土と藁が土壁普及の裏付けとなったと考察している。土壁が川沿いで普及し、山間に及んでいない現象は、水田の拡大の差と気候条件の違いによるものと指摘している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

民家の地域的多様性や歴史的変遷は、生業の違いや変化に大きな要因があることは、これまでの民家研究の主題の一つであり、地域の民家の成立過程が明らかにされてきた。本研究は近世から近代にかけて成立した民家形式が、近代の後半期に更なる変容を遂げ、新たな民家形式に発達する場合があることを、詳細な実地調査に基づいて実証したものであり、まずそのところに本研究の独自性がある。

次に民家成立の要因として、生業に加えてその基盤となる資源的な背景にまで踏み込んで考察した研究の方法は、これまでの民家研究にはない斬新なものである。それによって、生業の変化が地域の資源の分配や用途に影響を与え、それが民家建築の構法の変遷を促し、新たな民家形式が生まれることを導いた結論は明確である。

以上のように本研究は、民家形式の成立やその技術の発達を研究する分野において、生業とその基盤となる資源に着目することで独自の知見を見いだすとともに、新たな研究領域を切り開くものとして高く評価できる。

平成 24 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。